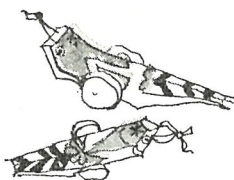


同志社女学校の生んだ人

——園部 マキさんのこと——



武 間 富 貴



を遺されたのであります。

マキさんは、明治十八年十二月、宮崎県高鍋藩士藤田半次郎の三女として生まれ、同地の尋常高等小学校を卒業した十六歳の時、キリスト教主義の学風に憧れ、志を立てて、はるばる京都へきて、同志社女学校へ入学せられたのですが、裕福でなかった彼女は、牛乳配達をしたり、また篤志家の援助を得たりして苦学しながら勉学に励んでおられました。この間に、マキさんは、キリストの愛を身を感じ、その一生を神と人とに伝えようと決心して、明治三十四年六月、同志社教会で、デビス博士から洗礼を受け、忠実な神の僕となることを、堅く心に誓われたのであります。

明治三十八年、抜群の成績と、熱烈な献身

の思いを胸にして、同志社女学校高等部を卒業せられた時、かねてマキさんのことを心にかけておられたデントン先生が、彼女にアメリカで看護学の勉強をさせようと思つておられた折から、同志社病院に入院中の宣教師ヴァン・クレン先生の看病にマキさんが当つていたので、同氏の婦米に際し、彼女を托そうとされました。マキさんは、神の導きを喜んで受け、ヴァン・クレン氏に連れられて、フィラデルフィア市に行き、同市の長老派教会の病院附属看護婦学校に入学することが出来ました。ここで彼女は看護学、産科学を学び、なお実習をして、四十一年秋に同校を卒業、翌年春まで米国各地の社会事業を見学をして四十二年になつかしの京都へ帰つて来られました。

＊

帰国後のマキさんは、同志社病院や京都看護婦学校に奉職し、大正二年には高等看護婦の養成を目ざして、自宅に信愛看護婦塾を設け、塾生の実地修学指導を兼ね、訪問看護助産保育指導の範囲を拡げたり、多くの看護婦養成をせられたのであります。この他、西陣地域の家庭を訪問して、看護と助産を、無料奉仕し、乳児保育の指導を始められました。

その頃、西陣方面は不況の波が押し寄せ、生活困窮家庭が急増し、その惨状は見るにたえぬことばかりであったので、それらの家庭生活の改善と向上を計り、また、乳幼児保護指導の重大なことを感じて、大正三年八月に信愛保育園を設置して幼児保育事業に従事する決意を披歴せられました。この信愛保育園は、京都市においての保育園の濫觴であったのであります。

大正十年に、児童保護および社会事業研究視察と募金のため、再び渡米して、十二分の見學と、多くの理解ある人々からの暖かい贈物を得て帰国せられた時、折も折とて、内務省から助成金がさがつたので、非常な感謝をもって新園舎を建てるのが出来たのであります。

大正十三年には、この地域の人々の願ひに応えて幼稚園を設けたので平安女学院の保育科生はここで保育実習をさせて貰うかたわら努力奉仕の体験を得ることが出来ました。

この頃のマキさんはもちろん非常に忙しかつたにもかかわらず、その湛能な英語を請われるままに京都府立第一高等女学校の上級学級の英語教師となったり、またその当時の同

志社女学校同窓会萩原会長に副会長就任を懇請されたので、同窓会活動の中心となつて、協力奉仕せられたことに皆々は感心もし、厚く感謝したのであります。

昭和五、六年頃に起つた世界経済恐慌による日本の不況は、失業の増大や中小企業の破産等々をまき起し、人々をどん底生活に陥し入れたので、マキさんは路頭に迷う哀れな母子の収容や保護と自力更生の道を講じる必要を感じて、昭和九年に母子の家「希望寮」を創設せられました。この事業もまた、京都市での最初の母子寮であつて、母子保護法施行の四年も前の事でありました。

数えきれないほどのマキさんの事業や、マキさんの歩んで来られた道は決して決して一通りやふた通りの苦勞ではありませんでした。無産者のために、無産者であつたマキさんが、愛と信仰と望を資本にして活動をして来られたからこそ、神が常に祈りに答えたもうたのであり、また多くの友人たちの援助が与えられたのであります。

昭和十五年十月、紀元二千六百年の祝典の際、マキさんは社会事業功勞者として、参列し、藍綬褒章を授けられたほか、マキさんと

園の受けられた光榮と表彰とは数えきれないほど沢山ありました。

第二世界大戦の最中から健康をそこねておられたマキさんは、急に病勢が悪化して、昭和十九年一月、その生涯を十二分に神と人とに仕えて静かに召されたのであります。

*

大正三年、青年画家園部逸堂氏と、美しい愛情によつて結ばれた家庭には、子女六人が恵まれ、その尊敬と愛慕を一身に集めておられた彼女は理性と愛情に富む、誠に「わかつたよいママ」でありましたし、お体の不自由な背の君によく仕えられた誠によい奥様でありました。

夫君逸堂氏始め、六人の子女たちが、有形無形の援助者であり、また理解者であつたことは、何物にも勝る力であり慰めであり、マキさんにとっては最大の感謝であつたと思います。

長女道子さん（昭13大神卒・校友）によつてつがれている彼女の残していかれたすべての尊い事業に祝福の豊かならんことを念じて筆をおくことにいたします。

（理事・同窓会長）